

備中高松城水攻め築堤跡

—高松城水攻め築堤公園建設に伴う確認調査—

2 0 0 8 年 3 月

岡山市教育委員会

備中高松城水攻め築堤跡 正誤表

頁	行・箇所	誤	正
1	14	認められるよになる	認められるようになる
4	6	水攻める	水攻めする
6	2	玉光源嗣	玉光源爾
14	図 11	編物	T 4 出土遺物
21	29	築堤高	築堤
23	図 21	副堤跡の断面図	副堤跡断面図
25	図 23	4 m	6 m



1. T1 基底部



2. 依跡



3. 土層断面



1. 築堤跡と公園整備状況



2. 史跡指定部分

序

岡山市はかつて「大和」と匹敵する勢力を誇っていたとされる「吉備の国」の中心地であり、縄文時代には西日本最大の規模を誇る彦崎貝塚をはじめ、全長350mの造山古墳や地方では希な壇上積基壇を備えた賞田廃寺、古代山城である大廻小廻山城などの遺跡が多数存在します。また、中世には戦火で焼失した東大寺の再建に尽力した重源ゆかりの万富東大寺瓦窯をはじめ戦国期には多くの城砦が築かれています。

備中高松城水攻め築堤跡は築堤公園建設に先だって遺構の範囲や規模を確認するために発掘調査されました。当地は史上名高い「備中高松城水攻め」に際して織田方の将である羽柴秀吉によって築造された堤防の跡で、これまで謎の多かった築堤の規模や構造が解明されることが期待されました。調査の結果、築堤の基底部や盛土層が確認され多数の俵の痕跡や杭列などが検出され、備中高松城水攻めの実態を知るための大変貴重な資料となるものと期待されます。

本報告書は、以上の調査成果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料として多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員の諸先生方のご指導と、発掘参加者ならびに地元のみな様のご支援をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成20(2008)年3月31日

岡山市教育委員会
教育長 山根文男

例 言

1. この報告書は岡山市教育委員会文化課・文化財課が平成10年4月13日から5月31日と、平成13年5月17日から6月15日にかけて実施した公園建設事業に伴う確認調査と平成14年10月に実施された用水路改修工事に伴う、岡山市立田797他の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆・編集は高橋が担当した。
第一章の周辺遺跡に関する知見、第四章の調査周辺の地籍調査および副提跡の測量にあたっては草原孝典氏の協力を得た。
3. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
4. この報告書に用いている方位は磁北である。
5. 図2は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「総社東部」「倉敷」を複製し、加筆したものである。
6. 遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査の経緯と経過	5
第3章 発掘調査の概要	9
第4章 結 語	17

挿入図目次

図1 周辺遺跡分布図	2	図13 T4平面図・断面図	15・16
図2 備中高松城水攻め築堤跡の位置	2	図14 T5平面図・断面図	15・16
図3 調査区位置図	7	図15 調査地周辺の小字名	18
図4 調査区区域図	8	図16 「備中国加夜郡高松城水攻地理之図」	20
図5 T1杭列1・2実測図	10	図17 「高松城水責め築堤遺蹟」	20
図6 T1出土遺物	10	図18 「高松城附近地図」	20
図7 T1平面図・断面図	11・12	図19 備中高松城推定城郭城	22
図8 T2平面図・断面図	11・12	図20 副提跡の位置	23
図9 T3平面図・断面図	11・12	図21 副提跡断面図	23
図10 編物	14	図22 千引遺跡の土塁	24
図11 T4出土遺物	14	図23 築堤残存部実測図	25
図12 T5	14		

図版目次

巻頭図版1	1. T1基底部	2. 依跡	3. 土層断面
巻頭図版2	1. 築堤跡と公園整備状況	2. 史跡指定部分	
図版1	1. T1・T2 (西から)	2. T1杭列1・2	3. T1依跡
図版2	1. T2依跡	2. T2 (北から)	3. 土層断面
図版3	1. T3 (北から)	2. T4	3. 現地説明会
図版4	1. T1出土五輪塔片	2. 出土遺物	

第1章 位置と環境

備中高松城水攻め築堤跡（以下築堤跡）は、足守川の形成した沖積平野の中流域に位置する。史上有名な「備中高松城水攻め」の際に織田方によって築かれた築堤の基底部に相当する。築堤は一部を除き上面を削平されており、水田地割りによってその痕跡を追跡することができる。しかしながら、JR吉備線、山陽自動車道、国道180号が縦断している利便性や、水田地帯が広がっていることから、一面的な住宅開発の波が押し寄せてきており、築堤跡を示す水田地割りに関しても喪失している部分が目立ってきている。

築堤跡の位置する足守川中流域は、本州島の西側を東西に延びる中国山地の南側に広がる標高300～600mのなだらかな隆起準平原である吉備高原が急激に落ち込んで、その先端と瀬戸内海の内海との間に形成された沖積平野である。この平野の中央を流れる足守川は、流路延長が24.4kmで、高陣山に水源を発する。平野部の各所には旧流路の痕跡が幾つも認められ、その際に形成されたと考えられる自然堤防（微高地）があり、各時代の集落遺跡が形成されている。とくに弥生時代から古墳時代にかけての遺跡密度は、岡山県下でも有数を誇り、古代に吉備と呼称されて当地の中核地であったことは間違いない。

平野部で遺跡の形成が認められるよになるのは、縄文時代からで、矢部奥田遺跡や真壁遺跡では、早期の押型土器が出土している。しかし、継起的に遺跡数が増加していくのは後期からで、総社市の南溝手遺跡ではイネの枳圧痕のある土器も出土している。イネ栽培に関する資料は、近年遡っていく傾向にある。分析手法の複数方向からの検証が必要であることはもちろんであるが、水田の存在を念頭に置いた遺構・遺物の検討といった方向性もイネ栽培の起源や解明には必要な視点と考えられる。

弥生時代に入ると、遺跡数は増加する。しかしながら、中期前半までは徐々に増加していく傾向が看取される。爆発的に遺跡数が増加するのは中期末からで、丘陵部を中心に分布する。甫崎天神山から南にかけての丘陵部を横断する形で建設された山陽自動車道の建設に伴う発掘調査では、竪穴住居数棟あるいは10数棟で構成される小規模な集落が主体となっている。おそらく、丘陵裾部に形成された扇状地地形に切り開かれた自立的な水田経営をおこなう集落であったと推測される。

後期になると、平野部に大規模な集落が形成される。それらは北から高塚遺跡、津寺遺跡、矢部南向遺跡、加茂A・B遺跡、東山遺跡、上東遺跡である。さらに周囲の丘陵部には墳丘墓が幾つも築造され、後期中頃には弥生時代の列島では、最大規模の部類に入る榎築墳丘墓も出現する。当地において弥生時代の墓が顕在化するのには後期からで、集落遺跡の大規模化と合わせて考えると、後期中葉に至って吉備と称される政治的地域ができあがったのではないかと考えられる。

古墳時代になると、全長が100mを越える大形古墳が継起的に築かれ、中期前半には全長が360m、列島規模では第4位の規模を有する造山古墳が築かれる。畿内以外では、前期から中期にかけて大形古墳が継起的に築かれることはなく、大王墓とされる古墳クラスの古墳が築かれることもない。これらの状況は、単に吉備世界の勢力を評価する材料にするのではなく、畿内中心とみる古墳時代像を見直す材料であり、日本書紀や古事記によって描かれた大王というものが果たして実存したのかといったことを検討する材料になるものといえる。



- | | | |
|-----------|--------------|----------|
| ①高松城築堤跡 | ⑬冠山城跡 | ⑳鴨谷川遺跡 |
| ②高松城跡 | ⑭すくも山城跡 | ㉑長野庵寺 |
| ③加茂城跡 | ⑮濠山古墳 | ㉒長野城跡 |
| ④宇喜多鉄砲場跡 | ⑯人崎庵寺 | ㉓人吉城跡 |
| ⑤鼓山城跡 | ⑰佐古田覚山古墳 | ㉔吉備津杉尾遺跡 |
| ⑥南崎天神山城跡 | ⑱小壠山古墳 | |
| ⑦上屋群 (西群) | ⑲高松城築堤跡 (福岡) | |
| ⑧津寺遺跡 | ⑳土原群 (東群) | |
| ⑨上沼遺跡 | ㉑延寿寺跡 | |
| ⑩高塚遺跡 | ㉒三手遺跡 | |

図1 周辺遺跡分布図

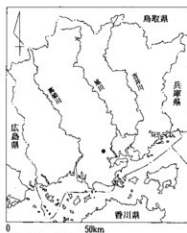


図2 高松城築堤跡位置

中期末から後期前半にかけて、大規模な古墳の築造は認められない。後期後半になると総社市のこうもり塚古墳のように全長が100m、横穴式石室の全長が19.4mの大形巨石墳も築かれる。周囲には石室全長が10mを越える古墳も幾つも築造され、後の律令制下の郡単位のまとまりを認めることができる。しかしながら、いわゆる切石の石室を有する終末期古墳は殆どなく、あるいは『日本霊異記』にも間接的に描かれている白村江の戦いによって打撃を受けた吉備世界を象徴しているのかもしれない。

古代以降も集落遺跡の形成は続き、津寺遺跡などでは官衙跡の全体像も明らかとなっている。県北部の発掘調査では、郡衙には郡寺が付属することや、郡衙政庁の構造もある程度把握されているが、当地ではそこまで官衙構造が明らかとなった調査例はない。

さて、戦国時代になると、備中国は、戦国大名を析出しなかった地域である。備中の守護大名であった細川勝久は、守護代荘元資の反乱以降、急速にその求心力を失っていく。そのため三村氏、石川氏、新見氏、多治部氏などの国人領主の勢力が伸張する。これらの国人層は、備中国の内部対立の解消の方向を地域外の勢力と結びつくことによって解決しようとした。それらは毛利氏や尼子氏である。そのため、各勢力と外部勢力とが入り乱れる地域状況を生み出すこととなり、結果として地域外勢力の草刈り場と化する。その先説的な状況が戦国時代末におこなわれた織田氏対毛利氏の大勢力間の直接武力衝突の場をつくりだしたのである。いわゆる境目地域である。足守川に沿ったように南北方向に並ぶ城、軍記物では境目七城といわれる榑川城、松島城、日幡城、加茂城、高松城、冠山城、宮路山城は、まさに地域の城を織田氏に対する最前線の城として毛利氏が再構成したものである。各城を舞台とした攻城戦は、『備前軍記』や『備中兵乱記』などの軍記物が鮮烈に語ってくれているが、なかでも有名なのが、天正10年(1582)におこなわれた「高松城水攻め」である。平野の中央に位置する平城である高松城に対し、攻め手の羽柴秀吉は周囲に築堤を築いて足守川の水を引き込んで孤立させ、その上で毛利氏の主力と対峙する。周囲の丘陵部にはその戦いの時に築いたと推測される土塁や障城の跡があり、今回調査された築堤基礎部分の構造等と共に、戦国時代末期における戦闘に付随する土木工事を解明するための絶好のフィールドを提供している。具体的に概観してみると、まず高松城を中心として東西両側に横たわる丘陵部上には土塁がまとまっている。この土塁は基本的に丘陵の稜線上に築かれており、所々に尾根を囲む土塁がある。尾根を囲む土塁は、障城と想定されるもので、総社市の千引遺跡では発掘調査されている。その成果によると、土塁の内側には物見台の機能を有する掘立柱建物等が検出されている。

また、土塁の分布を追跡すると、高松城を両繞するような形態はとらず、むしろ末端は不明瞭になる傾向がみられる。これと想定される交通路等(古く遡るであろうと推測される山道)を比較すると、それらと極めて近接する関係がみとれる。おそらく、当時の交通路と各障や障城とをつなぐ機能こそが一義的であったものと推測される。

丘陵部の土塁がそのような性格であるとする、高松城の両側の丘陵部に存在する通路状の土塁は、一見高松城を中心に展開しているように見えるが、むしろ背後に存在する長野城がそれらの扇の要の位置にある。長野城の南側には中世の山間寺院である長野院がある。長野院寺に接する山道は、岡山市の一宮で山陽道から分岐して足守へ至るものであり、さらに長野院寺の瓦には美作に至るルート上にも分布しているものも認められることから、美作から南下するルートでもあったといえる。当時、織田氏の勢力下であった備前からの兵站を考えた場合、具体的には山陽道の背後から毛利氏の勢力下

である備中への攻撃をおこなうとすると、長野庵寺を通る山道は極めて重要な交通路となる。したがって、その北側に位置する長野城の存在意義も明らかであろう。長野城は、標高148.6mの丘陵上にある山城で、小型ではあるが堀切・土塁を伴う。規模的に、足守の鍛冶山城のような地域の拠点となるような城郭ではないが、各城郭構成要素はしっかりとしており、土塁との関係から推測すると、各土塁や丘陵上に展開する小型の陣城の拠点となる陣城としてふさわしい内容を有しているといえる。高松城を水攻める際の痕跡とされる鳴谷川遺跡が、その眼前に位置することもうなずけよう。

このほか、高松城の北側には宇喜多氏の陣跡とされる鉄砲土手と称される郭状の遺構や、各武将の陣跡が分布している。一方、毛利氏の陣城も分布しており、そのうち甫崎天神山城は発掘調査されている。いずれも陣城という性格上、防御的な機能はそれほど高くない。しかしながら、この特徴は、織田信長が明智光秀の反逆により死亡し、その後織田氏対毛利氏の図式が解体されたという歴史事実を仮定の上で解消すると、織田氏と毛利氏の正面対決ということとなり、その戦闘への備えであったといえる。おそらく、織田氏は各地に展開する自軍の戦闘状況から、短期決戦を目指して高松城を水攻めにし、総大将の毛利輝元を誘い出して、各交通路からの一気呵成での軍勢移動を実現させたのであろうし、毛利氏は展開する自軍の背後に総大将を配置して味方の寝返りを防ぎながら膠着的な状況での長期的な戦闘を目指して各陣城を構築したものと推測される。戦闘の勝敗は、毛利氏が滅亡した甲斐の武田氏のように決戦にのぞむか否かにかかっていたものといえる。

さて、「高松城の戦い」の後、この辺りは備前岡山城主の宇喜多秀家の所領となるが、「関ヶ原の戦い」の敗戦によって宇喜多氏が没落した後は、徳川氏の旗本である花房氏8200石の所領となった。その後花房戦之の次男である榊原職直に1000石を分けて津寺知行所をつくり、さらに職直の次男にも1000石を分けて新庄知行所をつくった。

行政区画としての変遷を概観すると、当初は立田村であったのが、明治8年（1875）に隣村の高松村と合併して高松村となった。しかしながら、明治14年（1881）に分村して立田村になったが、明治22年（1889）再び合併して高松村となった。大正4年（1915）には高松町となり、その後生石村・加茂村・真金町・宮内両村を合併し、昭和46年（1971）には岡山市に編入された。

（参考文献）

- 出宮徳高ほか1981『三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 高橋伸二2000『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- 草原孝典1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
- 神谷正義ほか2006『南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群』岡山市教育委員会
- 高田馬治1965『高松城水攻めの話』高田馬治先生顕忠会
- 加原耕作1994『高松城水攻め始末』『岡山県の自然と文化』13 岡山県郷土文化財団
- 葛原克人ほか1980『日本城郭体系13 広島・岡山』株式会社新人物往來社

第2章 調査の経過

備中高松城水攻め築堤跡は天正10年（1582）中国地方の攻略を目指す織田氏と毛利氏との間で起こった戦闘である「中国兵乱」の事実上の決戦となった「高松の役」に際して、備中高松城を水攻めにするために構築された築堤の跡である。伝承では岡山市立田の通称蛙ヶ鼻を起点に足守川までの約2.6kmにわたって高さ4間、幅12間の堤防を築いたとされ、蛙ヶ鼻の築堤跡と足守川右岸の岡山市福崎に所在する副堤跡とされるものが国史跡となっている。築堤跡は明治30年、中国鉄道の敷設工事に際して大半が削平されたと伝えられるが、現在でも国史跡である蛙ヶ鼻築堤跡から国道180号線付近まで広がる水田の中に幅約20m、長さ250mほどの弓なりになった地割りが観察できる。

平成9年、岡山市公園課によって蛙ヶ鼻築堤跡周辺を公園にする計画が立案され、当該地における遺構の遺存状況の確認や築堤の構造などに関する基礎資料が必要となった。そのため岡山市教育委員会文化課（当時）では公園課からの依頼を受け平成10年4月から5月にかけて確認調査を実施し、現地説明会も開催された。その後、公園化の計画が一旦休止したものの、公園整備のためにはさらに遺構の広がりを確認する必要があることから、岡山市教育委員会文化財課によって平成13年5月から6月に第2次となる確認調査が実施された。

以上の経緯のもと備中高松城水攻め築堤跡の確認調査は平成10年4月13日から5月31日と平成13年5月17日から6月15日に実施された。さらに、平成14年10月には公園建設の付帯工事として水路と水門の工事が行われ立会調査を行った。

発掘調査組織

平成10年度

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 戸村彰孝

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）

狩野 久（岡山大学教授）

西川 宏（山陽学園講師）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

水内昌康（岡山市文化財保護審議会会長）

発掘調査担当者 富岡 博（岡山市教育委員会文化課課長）

出宮徳高（岡山市教育委員会文化財専門監）

根木 修（岡山市教育委員会文化課課長補佐）

神谷正義（岡山市教育委員会文化課主任）

（調査員）高橋伸二（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）

河田健司（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）

（経理員）羅久井和恵（岡山市教育委員会文化課主事）

平成13年度

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 玉光源嗣

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）
狩野 久（岡山大学教授）
西川 宏（山陽学園講師）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（日本考古学協会会員・前岡山市文化財保護審議会会長）

発掘調査担当者 出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課課長）
三宅一正（岡山市教育委員会文化財課調整主幹）
根木 修（岡山市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター所長）
神谷正義（岡山市教育委員会文化財課主査）
（調査員）高橋伸二（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事）
（経理員）福永みどり（岡山市教育委員会文化財課主任）

調査にあたり、対策委員の先生方には多大なるご指導・ご助言を頂いた。また、池田昌一、植松岩實、大沢昌弘、加原耕作、上林栄一、河本清、葛原克人、額田雅裕、林信男、藤井学、弘田和司、的場勇、三垣英二、高松城址保興会の諸氏・諸団体には諸処のご教示・ご助言を頂いた。諸処ご協力いただいた方々に深謝する次第である。

経過と概要

調査区の設定は国指定史跡である蛙ヶ鼻築堤跡に近い部分から順次T1からT5まで設定を設定した。T1からT4ではすべて人力による掘削を行い、T5は用水路改修に伴う立会調査であったため水門や用水管を重機により撤去した後に人力による掘削を行った。

調査は築堤遺構の確認に主眼がおかれたため、基本的には基底部の遺構が検出された時点で掘削をとめ部分的な掘抜きにとどめた。発掘区の層序は調査区の内両壁面のうちの一方から得た。

調査地は周囲の水田面より一段高くなっており築堤の痕跡が明瞭に残っている部分で、現水田耕土の直下が築堤の造成土層となっている。この造成土層を掘抜くと築堤以前の堆積層である粘質土とその上面に敷きつめられた俵痕跡等が検出される。俵痕跡は長軸50～60cm、短軸30～40cm程度の楕円形もしくは隅丸方形で花崗岩パイラン土等の山土が充填されており、この中に土器片や五輪塔片などの遺物が混入しているものも見受けられる。また、俵痕跡は造成土内でも部分的に観察できる。

築堤痕跡の上面や両端部は過去の開墾や土取りなどによって掘削を受けているものとみられ、近世から近代の遺物が検出される。

発掘日誌（抄）

平成10年 4月13日 発掘開始
5月18日 対策委員会開催
5月23日 現地説明会 約300名参加
5月31日 発掘器財撤去、発掘調査終了

平成13年 5月17日 発掘開始
6月6日 対策委員会開催
6月15日 発掘器財撤去、発掘調査終了

平成14年10月25日 立会調査開始
28日 実測、立会調査終了

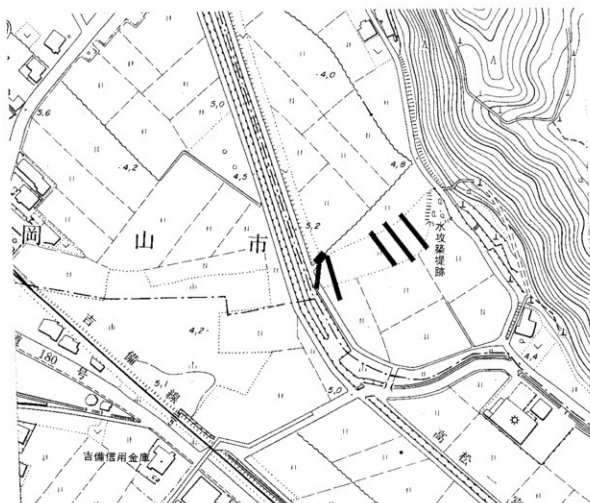


図3 調査区位置図

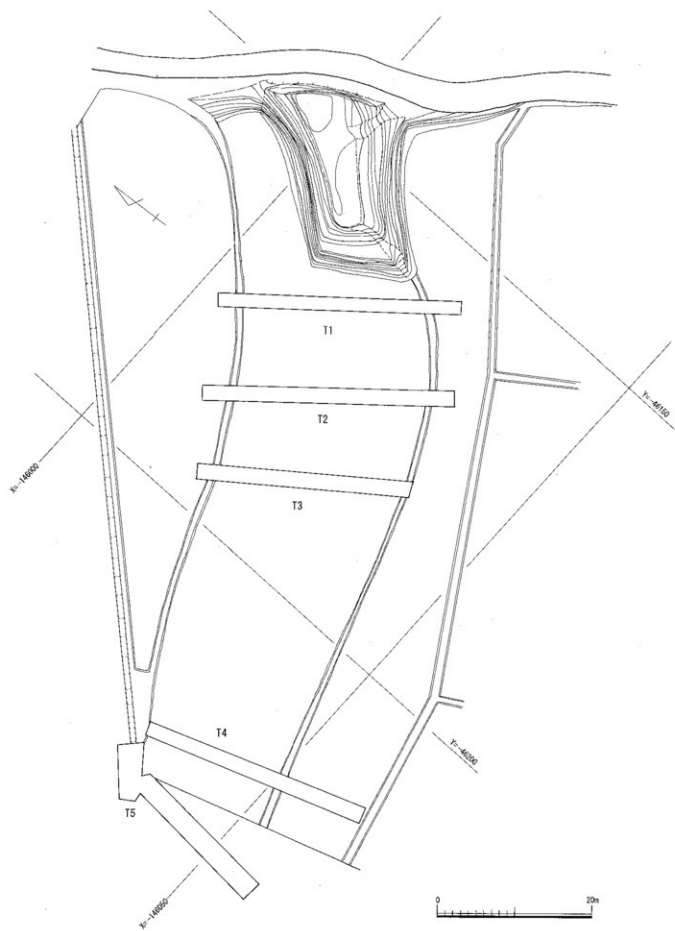


图4 调查区区域图

第3章 発掘調査の概要

平成10年度の調査

平成10年度は、公園建設予定地内に幅2m、長さ28～30mを測る調査区を3カ所設定し築堤の上層や規模、旧地形の把握などを目的とした確認調査を実施した。調査区は史跡指定地に近い北東側から順次T1からT3を設定し、T1から順次調査に入った。

各調査区は調査の対象を築堤の基底部検出に主眼を置いたもので、地表面からの深度は1m程度である。築堤以前の土層については部分的な抜き掘りに留めた。

T1

1. 概要

T1は築堤の起点となる丘陵端部に最も近い地点に設定したトレンチである。層序は図7の2層から6層が近世以後の堆積層で7層から49層が築堤の造成土層である。築堤造成土の両端部までの距離は26.5mを計る。49層以下は自然堆積層で築堤以前には湿地であったと考えられる。遺構は2列の杭列と地表から約1m程度の深さで築堤の基底部と見られる俵（土嚢）の痕跡を検出している。

2. 遺構・遺物

杭列1・2（図5）

杭列は築堤の上流側にあたる部位で2列検出された。築堤端部と考えられるラインより4m程度内側から検出されている。杭列は外側の第1列が50cm程度の間隔で打たれており、横方向にしがらみ状の棒材が部分的に認められる。内側の第2列は20～40cmの間隔で打たれており、こちらもしがらみ状の棒材が部分的に残る。また、この棒材より下でも俵痕跡が検出される。これらの杭列は築堤以前の地表面である粘質土層に打ち込まれており、基底部の根固めもしくは築堤工事の初期段階での水の堰き止めに利用されたものと考えられる。

俵跡（図7）

俵痕跡は築堤の基底面で検出された。俵跡は長軸30～60cm、短軸20～30cm、厚さ20cm程度の楕円形もしくは隅丸方形で花崗岩バイラン土が充填されており、この中に土器片や五輪塔片などの遺物が混入しているものも見受けられる。また、俵跡と見られる土層は築堤の盛土内でも多数認められる。

遺物（図8）

出土遺物はきわめて僅少であるが、基底部の俵跡からは備前焼壺片、石灰岩製の石造五輪塔片が検出された。時期は15から16世紀頃に位置づけられるが、これらの遺物は土砂とともに俵に詰め込まれて持ち込まれたものもある。

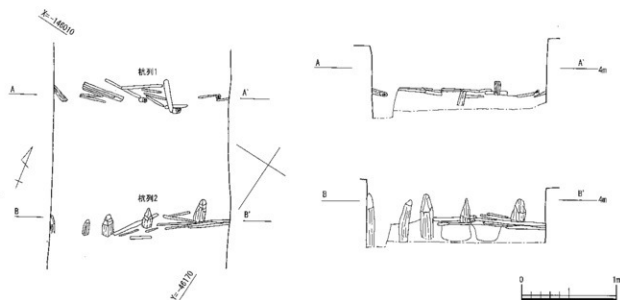


図5 T1 杭列1・2 実測図

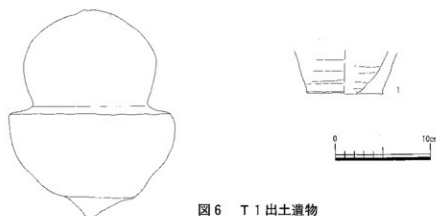


図6 T1 出土遺物

T 2

1. 概要

T 1 に隣接した調査区である。T 1 と同様に上流側に 2 列の杭列が見られるものの、しがらみ等は検出されなかった。築堤基底部の依跡は地表から 0.8m 程の深さで検出されるものの、検出された依痕跡は T 1 に比べてやや粗であり、部分的に依跡の見いだせない部分もある。層序は 3 層から 10 層までが近世の堆積層で 11 層から 37 層が築堤造成土層である。

2. 遺構・遺物

杭列 調査区の北より 2 列の杭列が検出されたが、しがらみ等は検出されなかった。またこの杭列に対して斜め方向にのびる杭列も見られる。また、調査区中央付近でも杭が打ち込まれているのが検出されているが、それぞれの関連については明らかではない。

依跡 T 1 同様に基底部に依痕跡は検出されるものの、検出された依跡は T 1 に比較して減少する傾向にある。

遺物 遺物は築堤以前のものとみられる少量の土師器細片が検出されたのみである。

图7 T1平面图·断面图

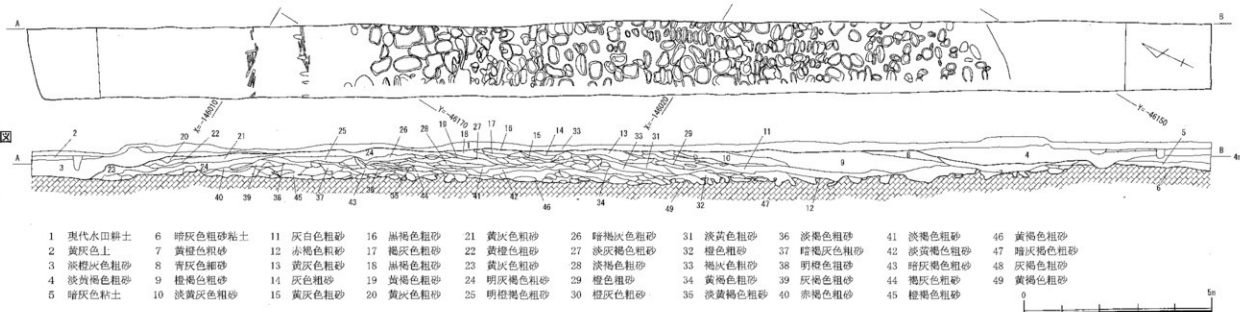


图8 T2平面图·断面图

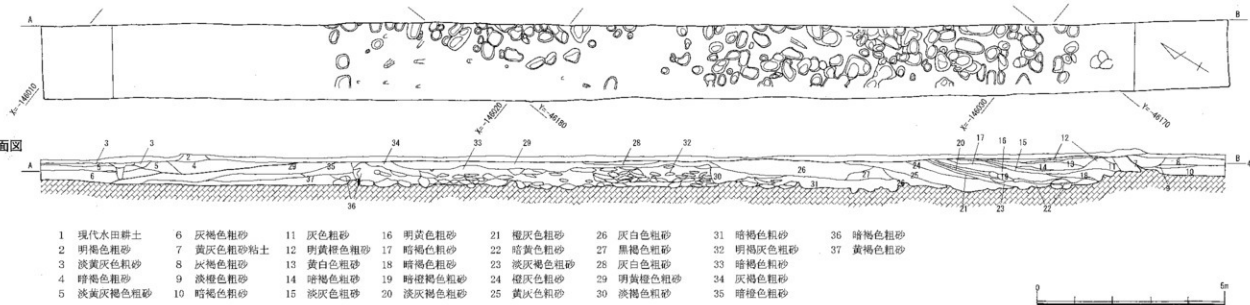
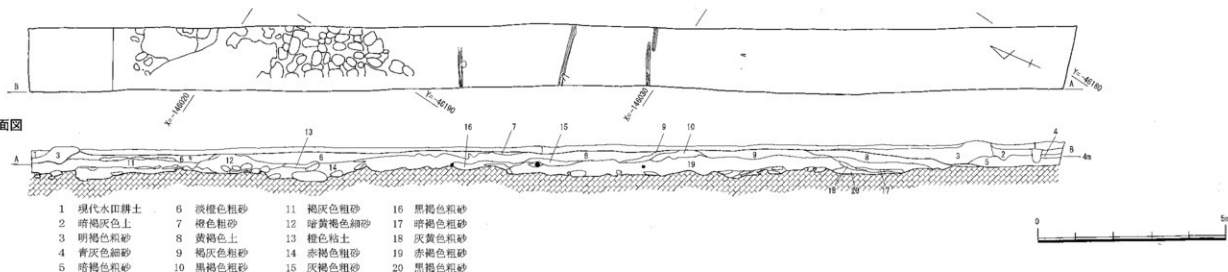


图9 T3平面图·断面图



T 3

1. 概要

T 2の西側に設定された調査区である。調査区の南北両端では基底部に依跡が検出されるものの、調査区の中央部では基底部付近で依跡はほとんど検出されず、盛土内でも依跡と見られる土層が減少する傾向にある。調査区中央部では東西方向にのびる丸太材が3列検出された。層序は2層から5層が近世以後の堆積層で6層から20層が築堤の造成土層である。

2. 遺構・遺物

横木 調査区の中央部付近で3列の丸太材が検出された。調査範囲の制約もあり広がりについては明らかにできなかったが、築堤の方向に沿って3列が約2mから3mほどの間隔で平行している。また、部分的ではあるがこの木材の下流側にあたる部分に杭が打ち込まれており、これらの横木を固定したものと認められる。横木の検出された部分については依の痕跡がほとんど見られず、植物質の編物が敷かれている状況が部分的ではあるが観察できる。これらの横木は基底面よりやや高い位置で検出されており、築堤盛土を補強するための木組の可能性が考えられる。

遺物 遺物は築堤構築以前のものとみられる少量の土師器細片等が出土した。

平成13年度の調査

平成13年度は公園用地の西端部にあたる位置に幅2m、長さ30mの調査区を1か所設定し調査を行った。調査は前回の調査と同様に築堤の基底部の検出に主眼をおいたもので、地表面からの深度は1m程度である。

T 4

1. 概要

水田耕作土を除去した段階で江戸期の粘土探掘穴と考えられる土坑が検出された。調査区南端では多量の砂の堆積が見られた。また、部分的に近世から近代にかけての土取りが行われており、不整形の落ち込みが見受けられる。基底部では依痕跡はまったくみいだせないが、植物質の編物を敷いた上に盛土を行っている状況が部分的ではあるが確認された。層序は3層から6層が近世の堆積層で7層から12層が築堤の造成土層である。

2. 遺構・遺物

編物

調査区中央部付近の深さ0.9～1m程度の築堤基底部に検出された。この編物は藁等の植物を筵状に編んだもので幅1.5m、長さ6mにわたって検出された。自然堆積層である粘質土の上に敷かれ、その上に盛土を行い築堤造成を行っているものと見られる。なお、この調査区では依の痕跡はほとんど検出されなかった。

遺物

出土遺物は築堤以前の土層である粘土層から土師質の土師質鍋口縁部（3）が出土した。また、近世以後の土層からは、唐津焼の碗（4）、肥前系磁器碗（5）、弥生土器片（6）、瓦質鍋片（7）が出土した。



図10 編物

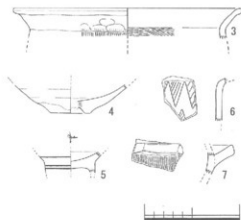


図11 編物

平成14年度の調査

平成14年度は公園整備に付帯する工事として実施された水路と水門の工事に伴うもので、既存の道路部分の暗渠水路と水門を撤去した後に調査区T5を設定し立会調査を行った。

T5

1. 概要

この調査は前記したとおり公園整備に付随して実施された水路と水門の改修工事に伴うもので、コンクリート製の暗渠水路と水門を掘削機械で除去した後、遺構の確認作業を行った。調査の結果水路部分からは多数の杭が検出されたものの、過去の土木工事が深部まで達していたため、杭の時期については明らかにできなかった。水門部分についても過去の工事による掘削が深部にまで至っており、明確な遺構は検出できなかった。土層は水路部分の側壁で築堤の造成土層が観察できるのみである。

層序は1層が道路および水路の造成土層であり、2層から4層までは近世以後の堆積層である。6層から10層までは築堤の造成土層である。上面及び両端部ともに大きく削り取られており、残存している築堤造成土は幅18m程が確認できたのみである。



図12 T5（北から）

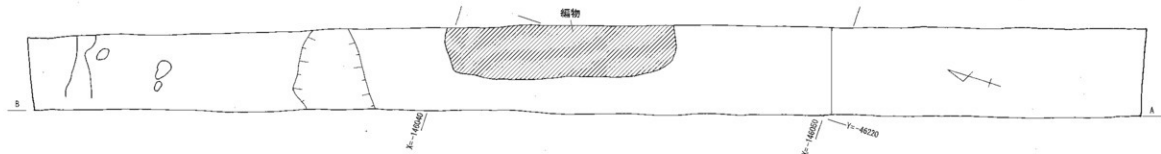


図13 T4平面図・断面図

- | | | |
|----------|-------------|--------------|
| 1 現代水田耕土 | 5 淡黄褐色砂礫 | 9 淡黄褐色微砂シルト |
| 2 淡褐色粗砂 | 6 淡黄褐色砂礫・粘土 | 10 淡黄褐色微砂シルト |
| 3 淡褐色粗砂 | 7 淡灰褐色土 | 11 灰白色粗砂 |
| 4 淡灰色細砂 | 8 淡灰褐色微砂 | 12 青灰色微砂シルト |

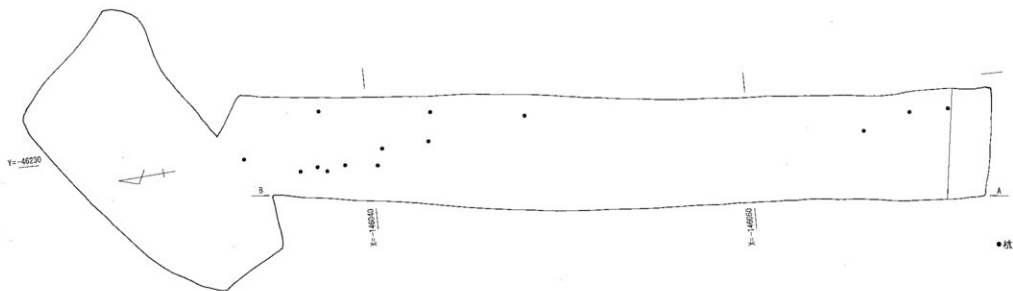


図14 T5平面図・断面図

- | | | |
|---------|-----------|------------|
| 1 造成土 | 5 淡褐色微砂 | 9 黒灰色細砂シルト |
| 2 暗灰色粗砂 | 6 淡灰黄褐色微砂 | 10 淡灰褐色粗砂 |
| 3 青灰色微砂 | 7 淡褐色微砂 | |
| 4 黄褐色微砂 | 8 淡灰褐色微砂 | |



第4章 結語

調査の成果

今回の調査の結果、築堤の規模と構造についてその一部ではあるが明らかにすることができた。

T1、T2では基底部に多数の依跡を検出したが、造成土層は、幅26.5mにわたって検出することができた。これが築造当初の築堤幅と考えられるものの、後世の削平等によって縮小したか、あるいは盛土の流失によって幅が広がった可能性も否定できない。残存する築堤の大半が削平を受けているため、高さについては今回の調査で明らかにできなかったが、地表面から基底部までの1m足らずではあるが、築堤盛土も確認することができた。盛土については、集中的に依によって積まれている部分と土のみで盛られている部分があった。

また、基底部の様相も調査区によって異なっていた。T1およびT2においては築堤以前の地表面である粘土層の上面で依跡が検出されたため、全面にわたって基底部には依が敷かれている状況が想定されたがT3では依跡の検出数は減少し、T3・T4では籠状の編物が敷かれた上に盛土されており、築堤の構築方法が全体で一様ではないものとみられる。

蛙ヶ鼻付近の地形と築堤の位置

調査地は丘陵末端部から低位部に位置しており、周囲を沼地で囲まれた高松城方面からの水の唯一の抜け口となっている。この地形から、築堤は丘陵末端部から低位部をはさんで南西に広がる微高地までの間を堰き止めたものであることがよくわかる。築堤跡は今回の調査対象地となった蛙ヶ鼻付近から備中高松駅付近までについては明瞭にその痕跡が認められるものの、備中高松駅の南から足守川付近までは、今日では築堤の跡が認め難い状況にある。

図15は備中高松城の南方から調査地周辺の小字名である。高松城周辺では城郭や堀の存在を示す字名が観察できるものの、調査地付近ではわずかに「土手後」の字名が築堤との関係を想起させられるものの、この他には明確に築堤の存在を示す字名は認められないようである。

築堤の位置についてはその高さと同様に軍記物の記載が長らく信じられており、通説では足守川から蛙ヶ鼻までの延長が2.6kmから3kmということになっている。また、かつては太閤記などの記述にあるように、基底部幅12間、高さ4間で延長約3kmの堤防を12日間で完成させたという説が流布されていたが、今日ではそれをそのまま信じることはほとんどないと言って過言ではない。また、築堤の位置については築堤跡とされる部分が松山往来に並行しており、平野内に存在する微高地をつないで築堤した場合、伝承のような高さが必要なく、築堤に要する土量は伝承よりもはるかに少なくすむからにはかならず、備中高松駅付近から足守川にかけては断続的に存在する微高地をつないで築堤されたものと考えられる。

築堤高と延長に関する研究史

備中高松城は秀吉の奇策「水攻め」によって開城することになるが、その最中に発生した本能寺の変と秀吉による中国大返し、その後の天下人への成長などの物語や、主家の安泰と籠城する兵士の生命と引き替えに城主清水宗治の切腹にいたる悲話など劇的な展開のなかで多くの人々の関心を集めたこともあり、築堤の規模が誇張されて伝えられていた可能性が高い。そのようななかであって、高松城

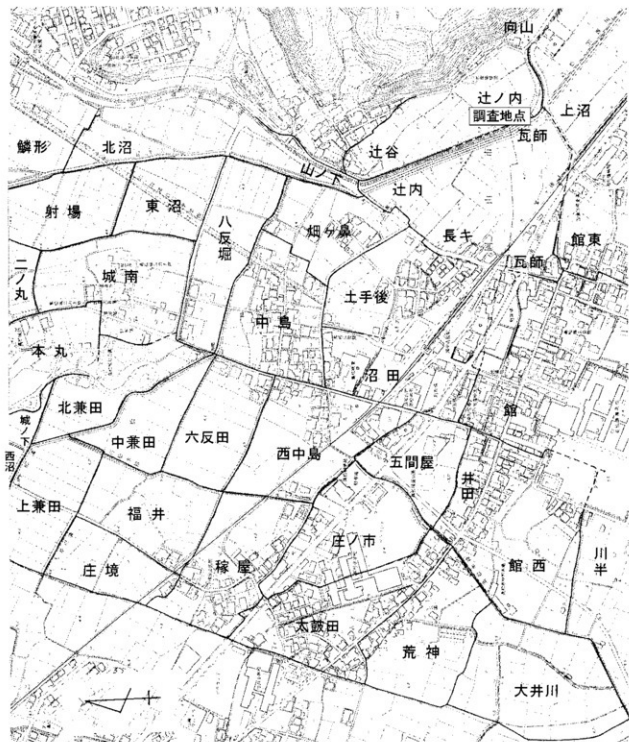


図 15 調査地周辺の小字名

水攻めに関して最も早く実証的な研究、実地調査を行ったのは古川古松軒である。

江戸時代の地理学者である古川古松軒は高松を訪れ詳細な地理調査を行ったとみえ、寛政3年(1791)に作成された「高松城水攻め地理之図」(1)がある(図16)。これには「新堤ヲ築ク」として蛙ヶ鼻付近の築堤が記載されており、現地を訪れた古松軒の認識では大規模な築堤が調査地付近に限られていたとも推察されるものである。同時にこの絵図では足守川の土手が切られた状態で描かれており、足守川の東岸に「但馬土手」等の記載が認められる。また、水没地域がほぼ松山往来より北側であることをよく示しており、水攻めから200年程度経過した当地の景観が描写されている。

近代に入って、歴史学の立場から高松城水攻めについて検討を加えたのは瀬川秀雄である。瀬川は「高松城の水攻め及城將清水宗治の首塚に就いて」(2)のなかで水攻め堤の位置について検討するとともに鳴谷川からの導水についてふれ、築堤の位置は足守川の吉備線鉄橋付近から蛙ヶ鼻までの三十町であるとし、鳴谷川からの導水は不可能であると結論づけた。

永山卯三郎は「高松城水責築堤遺蹟」(3)の中で後に国指定史跡となる蛙ヶ鼻築堤跡とその先に広がる周囲より一段高い水田を堤防跡と認識し(図17)、残存する部分から築堤の規模を基底部幅12間、上幅6間と推定し、堤防の土は明治36年(1903)中国鉄道(現・JR吉備線)の敷設工事に際して採土されたことを明らかにした。

1936年には大類伸・鳥羽正雄によって『日本城郭史』(4)著された。築堤高を四間とし、それにもとづいて水没範囲を想定しているが、築堤位置については瀬川の説を踏襲しているものといえる。しかしながら、鳴谷川からの導水は行われたと結論づけている。また、これ以降は高松城の水攻めに関する論考ではたびたびこの図(図18)が引用されることとなる。1965年の『備中高松城の水攻め』では高田馬治によって前記した築堤の土取り前の状況が詳細に述べられている。(5)

1978年の『日本城郭大系 岡山・広島』(6)では備中高松城が紹介され、水攻めに関しては「城外三里の間に高さ二丈の堤を築き、堤の上に多数の砦を構え、付近の足守川や長野川などの水のほか谷水を堰き止めて引き入れた。」と引用したうえ、築堤の規模を「基底幅約21m、上幅約10m、高さ約7mで、長さ約2.5kmに及んでいたらしい」としている。

これ以降もいくつかの論考もあるが、基本的には前説を踏襲するものであり、築堤の位置や高さに関する記述も大差はないと言って過言ではない。また、なかには一律に伝承どおりの規模で築堤を復元して土量を算出し、秀吉の動員力を推定しようとしたものまで見受けられる

しかし、築堤の規模については従来から疑問視する指摘もあった。築堤の規模に関連して、地形の問題を指摘したのは藤井駿と加原耕作である。『備中灌漑十二箇郷用水史』(7)の中で「その堤防は高梁川東分流の残っていた自然堤防を巧みに利用していたからこそ、短時間で完成し、しかも大きな効果を発揮しえたものといえよう。」と指摘し、築堤そのものが伝承のような規模ではないことを示唆したのである。また、加原耕作は伝承のような大堤防が築かれたのは蛙ヶ鼻付近のみで、それ以外については足守駅付近に残る通称「副堤跡」を例にとり、堤防全体の規模は伝承にあるほど大きなものではなかった可能性を示した。(8)

次に地理学の視点から築堤の規模について検討されたものを紹介する。1996年、植松岩實は足守川流域の微地形の検討により、築堤の規模に関する問題にもふれ伝承にあるような大規模な築堤でなかった可能性を示唆している(9)。また、1996年には地元の岡山県立高松農業高校農業土木科によって高松城と周辺地域の詳細な地形測定の結果をまとめ、高松城周辺が盆地状の地形であることを指摘し、

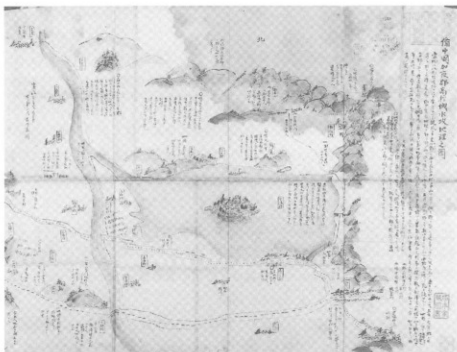


図 16 古川古松軒「備中国加夜郡高松城水攻地理之図」

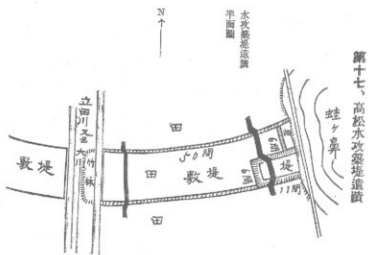


図 17 永山卯三郎「高松城水攻の築堤遺蹟」



図 18 大類伸、鳥羽正雄「高松城附近地図」

史料

羽柴秀吉書簡

先度鍾之事申遣候処早速馳走候て相越今祝者候、此者儀すくも塚の城乗崩、一人も不残討果候、再かはやの城、水之手迄貫詰昨日落居候、同昨日かもの城端城乗破悉く放火候、然る上は何の城成共、可取巻候はば、鍾之事今式百束馳走にて相越候は可為祝者候為念申遣候草々

五月三日

秀吉 花押

児島之内郡年寄中

尚以てなほの事今式百束の分早々に馳走可為祝者候已上

〔岡山市の文化財〕 第一集

城跡と蛙ヶ鼻築堤跡の標高差から水攻め時の水面高を5.5mと仮定したうえで、堤防延長は1300mほどであったとする仮説をまとめた(10)。

歴史地理学分野から堤長、提高への疑問を提示したのは龍瀬良明である。龍瀬は高松城周辺の地形を詳細に検討し、高松城と蛙ヶ鼻から求められる海拔高から算出して築堤の堤長・提高を導くという方法で、提高を1.5m程度、堤長を300m程度であるとした。(11) また、池田昌一は高松城、蛙ヶ鼻築堤跡の詳細な現地調査から水攻め築堤の高さを求めることを試みたのである(12)。

- (1) 「高松城水攻め地理之図」 岡山県立図書館蔵
- (2) 瀬川秀雄「高松城の水攻め及清水宗治の首塚に就いて」『史学雑誌』20-11 1909
- (3) 永山卯三郎「高松城水攻築堤遺蹟」『岡山縣史蹟名称天然記念物調査報告』第一冊 岡山縣史蹟名勝天然記念物調査会 1921
- (4) 大須伸・島訓正雄「日本城郭史」雄山閣 1936
- (5) 高田馬治「高松城の水攻め」高田馬治先生頌徳会 1965
- (6) 葛原克人ほか「日本城郭大系 岡山・広島」新人物往來社 1978
- (7) 藤井豊・加原耕作「備中滋井十二郷用水史」滋井十二郷郷組合 1976
- (8) 加原耕作「高松城水攻め始末」『岡山の自然と文化』13 岡山県郷土文化財団 1995
- (9) 植松岩實「大船尺図で岡山平野の微地形と歴史を読む—足守川・笠ヶ瀬川の場合—」『操山論叢』岡山県立岡山操山高等学校 1996
- (10) 岡山県立高松農業高等学校農楽土木科「備中高松城水攻め—築堤工事の土木工学的検証—」1996
- (11) 龍瀬良明「備中高松城水攻めへの異論」『城郭史研究』19号 日本城郭史学会 1999
- (12) 池田昌一「高松城水攻めの考察」『城郭史研究』21号 日本城郭史学会 2001

築堤高の問題

今回の調査では部分的なトレンチ調査ではあるものの、蛙ヶ鼻付近での水攻め築堤の構造の一端をとらえることができた。しかしながら、具体的な築堤の高さについては、削平を受けていることもあり、明らかにすることはできなかった。

現存する国指定史跡蛙ヶ鼻築堤跡(図23)についても、鉄道敷設工事からかろうじて保存されたと伝えられるが、およそ北半部が削り取られていることは周辺の地割りからも明らかである。また、残存する堤高についても水攻め当時のままであるかどうか検討の余地も残る。

しかしながら、この調査に先立って実施された、高松城三の丸や本丸での調査により、高松城自体の水攻め時の標高はおおよそではあるが明らかになっている。また、今回の調査で確認された築堤以前の標高、あるいは残存する史跡指定部分の残存高などから水攻め築堤高のおおよその高さについては復原が可能であると考えられる。

まず高松城の標高をみると、本丸では現在の最高点は7.7mであるが、これはこの地に入封する花房氏の陣屋として利用された際に追加造成されたものと見られており、水攻め時の標高はさらに低かったものと想定される。三ノ丸については発掘調査により標高4.7m程度であることが確認されたが、こちらは廃城後に水田化される際に若干の地下げが行われたもので、本来は現状より20から30cm程度高く、標高5m前後であったと考えられる。

次に今回の調査で築堤の基底部となった部分の標高はおおむね3.5m前後で、高松城三ノ丸との比高差は僅かに0.7mから1mほどである。さらに史跡指定を受けている築堤跡の最高点が標高8.8mを測り、これが当時の築堤高を反映しているものであるとするならば、基底部からの比高差は5m程度ということになり、高松城を水没させるには十分すぎるほどの高度である。以上のことを考慮すれば、いささか想定される高さに開きはあるものの、蛙ヶ鼻付近の築堤高は最低でも高さ1.5m程度は必要であり、最高でも5mを超えることはないであろう。



図19 備中高松城推定城郭域

副提跡 (図20・21)

さらに、水攻め築堤に関してはもうひとつ足守川西岸の足守駅の南に副提跡とされる堤防遺構があり史跡に指定されている。これは水攻めの際に足守川の堰き止めに関連する遺構とされているが、現存高で地表面から高さ1.4m、幅5.2mで長さは10mほどが保存されているに過ぎない。もとより、水攻め築堤の一部であるという明確な証拠はないものの、高松城周辺の山中に遺存する戦国期のものと推定される土塁遺構や図22の総社市千引遺跡(1)には同程度の規模の土塁も見受けられることから、築堤の一部である可能性も検討されるであろう。

また、加原の指摘(2)にもあるように、この副提ほどの規模で微高地を利用しつつ高松駅付近から足守川までが結ばれるならば、築堤に要される土量はかつて推定されたほどは必要ないと考えられる。

(1)『千引遺跡』総社市教育委員会

(2)加原研作「高松城水攻め始末」『岡山の自然と文化』13 岡山県郷土文化財団 1965

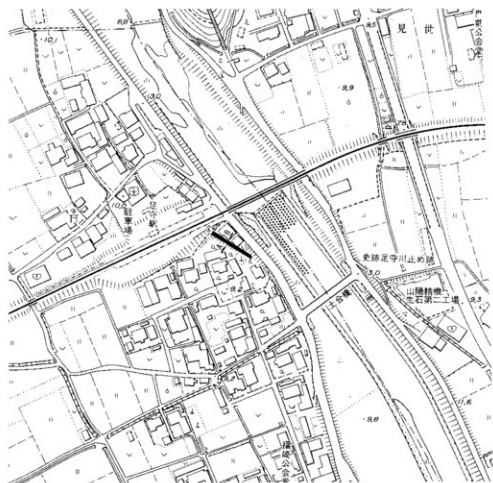


図 20 副提跡の位置

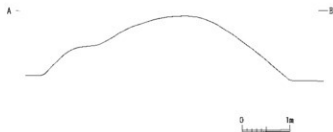


図 21 副提跡の断面図

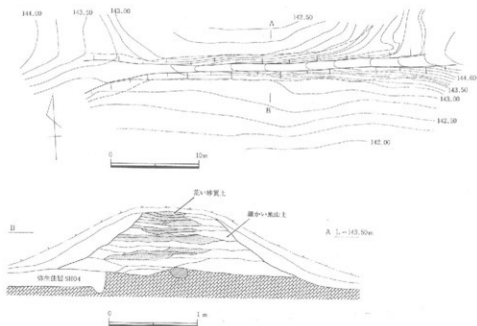


図 22 千引遺跡

水攻め築堤の諸例

備中高松城のほかに戦国期に水攻めが行われたものに、秀吉による和歌山県で紀州太田城水攻め、埼玉県では石田三成による忍城水攻めなどが知られる。

太田城の水攻めは天正年13 (1585) 4月、秀吉による紀州攻めの最後に行われたもので、水攻めの規模としては最大規模であるとみられるが、現在のところ太田城の詳細な位置や、築堤の規模についてはなお疑問が多い。この、太田城水攻めでは城側に溺死者の記録はないものの、攻め手側の宇喜多秀家の陣営で多数の溺死者を出したとされる。(1)

忍城の水攻めは天正18年 (1590) 6月から7月、秀吉による小田原攻めに際して水攻めにされたものである。伝承では荒川左岸から利根川右岸に延長14km、高さ4間 (5.4m) の築堤を5日間で完成させたとされるが落城することはなかった。この三成によって構築された築堤は石田堤と呼ばれ鴻巣市袋地区や行田市堤根に遺存している。この築堤は粗雑な築堤方が災いし、攻め手側に死者を出した後には和談開城となっている。(2)

このほかにも、水攻めについては数例の事例はあるものの、備中高松城水攻め、紀州太田城水攻め、武蔵忍城水攻めが日本三大水攻めとされている。

(1) 頼田雅裕「秀吉と日本三大水攻め」『秀吉と日本三大水攻め』和歌山市歴史博物館 1999

(2) 『吹上郷土読本』吹上町教育委員会 1991

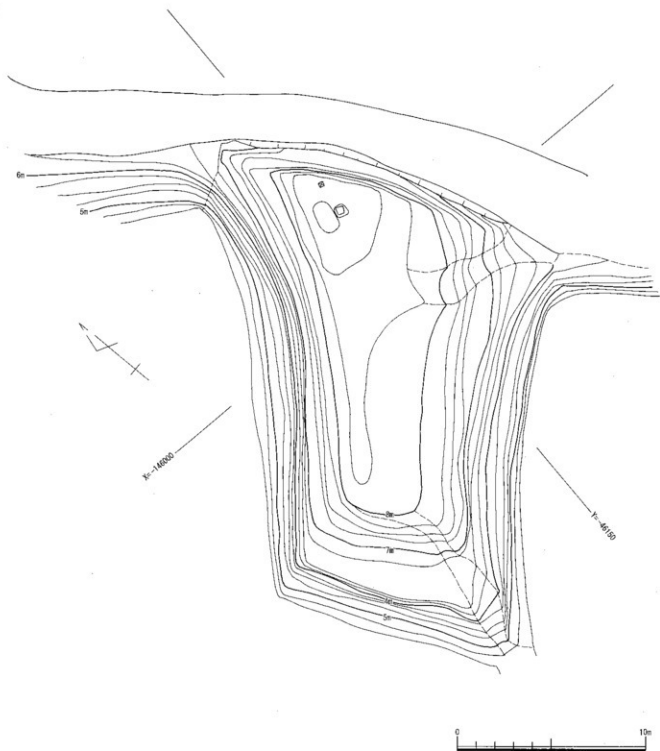


图 23 築堤残存部实测图

まとめと課題

史跡となっている蛙ヶ鼻築堤跡(図23)については自然地形を削りこんだものとする解釈もあるが、南端部の草の生えてない部分を観察する限りでは人為的な盛土と考えられる水平堆積が認められる。北側の水田区画から国指定部分については、幅が当初の半分程度に削られているのは確実である。また、一部にこの指定部分を自然地形と見る向きもある。しかしながら、前記した水田区画のあり方や、土層の露出部分を見た限りでは人工的な水平堆積と考えられる部分が観察されるため、切り通し道より先では人為的な盛土であると判断される。

築堤の規模については当時の動員力から考えても一律に同規模のものを構築したとは考え難い。中国兵乱記などにある高さ4間という数値は多分に秀吉側からの脅しの効果であった可能性が高いのではないかと考えられる。しかしながら、蛙ヶ鼻から高松駅付近までの低位部の約300mについては頑強な堤防が構築されており、この築堤と足守川までの微高地をつなぐ小規模な築堤を12日間で完成させたということは驚異的な動員力であったと言えるのではないだろうか。

文献史料に関しては、軍記物を除けば備中高松城水攻めに関する史料は決して多いとは言えないが、地元に残る史料のひとつに羽柴秀吉書簡がある。(史料1) この書簡は備前児島郡の郡年寄に宛てた秀吉からの縄の催促であり、日付から察して水攻めに用いる材料を催促したものである。この他に吉川元春が家臣に宛てた書簡の一節に「下口を築き塞ぎ」という記載があり、これがまさに調査地付近の状況を伝えるものであると見られる。伝承にある大規模な築堤に関する記載は江戸期に入って編纂された軍記物以外には確実な史料が見いだせないのである。

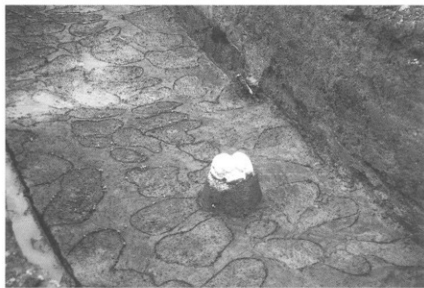
今回の調査は築堤全体からみれば極めて僅かな範囲の確認調査であった。蛙ヶ鼻付近の築堤は調査後に公園となった部分を除けば、現在もお水田の中に残されている。また、備中高松駅付近から足守川にいたる築堤は周辺の宅地造成などにより今日では見いだし難い状況にある。備中高松城についても本丸のみが史跡指定を受けているものの二ノ丸や三ノ丸あたりも徐々に宅地化されており、今後は水攻め築堤跡をはじめ、備中高松城と周辺の陣地跡など一体化した保存策を講じる必要があると考えられる。



1 T1・T2 (西から)



2 T1 杭列 1・2



3 T1 痕跡



1 T2 依跡



2 T2 (北から)



3 土層断面



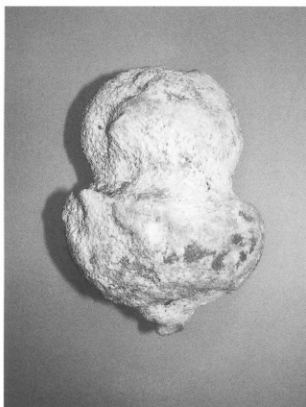
1 T3 (北から)



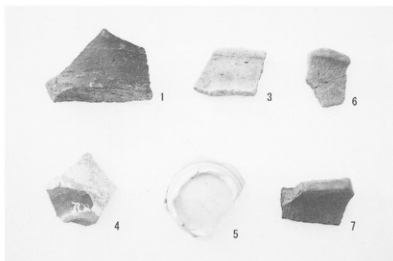
2 T4



3 現地説明会



1 T1出土五輪塔片



2 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	びっちゅうたかまつじょうみずせめちくいていと							
書名	備中高松城水攻め築堤跡							
副書名	高松城水攻め築堤公園建設に伴う確認調査報告							
編著者名	高橋伸二							
編集発行機関	岡山市教育委員会文化財課							
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 Tel 086-803-1000							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかまつじょうみずせめ 高松城水攻め ちくいていと 築堤跡	岡山県岡山市 たづた たかまつほら 立田・高松原 こかい 古才	33201		34° 41' 9"	133° 49' 36"	1998.4.13~5.31 2001.5.17~6.15 2002.10.25~10.28	300	公園建設 に伴う 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
高松城水攻め 築堤跡	堤防	安土桃山 時代	痕跡 杭列		弥生土器 土師器 備前焼 瓦質土器 陶磁器 五輪塔	天正10年に築か れた水攻め築防 の基底部を確認 した		

備中高松城水攻め築堤跡

—高松城水攻め築堤公園建設に伴う確認調査—

平成20年3月31日

編 集 岡山市教育委員会

発 行 岡山市教育委員会

印 刷 山陽印刷株式会社

なお著作権は岡山市教育委員会に帰属する